

## 拾遺和歌集の恋部の構造 — 拾遺抄と比較して —

山崎 正伸

古今集の恋部構造について、松田武夫氏は『古今集の構造に関する研究』において、「恋愛初期の段階における感情のさまざまな動きや状態を軸とし、それを四季の巻々における主題と同様に考へ、その標識のもとに、同一性質の歌を統合する方法を採つてゐる。又、河・花・鳥・夏・海・篝火・水・山・関・春・夏虫・秋・雪など、天然自然の現象や花鳥虫類などにこと寄せた歌を、それぞれの項目のもとに配置する方法をも併用し、多岐にわたる忍ぶ恋の種々相を、整然と展開させてゐる。」<sup>(1)</sup>とされる。佐藤和喜氏は、『一冊の講座古今和歌集』の「構造論諸説」の中で、久曾神昇氏、松田武夫氏、新井栄蔵氏、吉川栄治氏の研究を通覧されて、「恋部全体がその大枠において時間的展開にそつて構成されているという線は崩れないと思われ。」<sup>(2)</sup>と、古今集の恋部構成に時間的展開による構造を認めておられる。このように恋部が恋愛段階構造を持つということとは、広くテキストとされる新日本古典文学大系『古今和歌集』でも、恋一を「逢わずして慕う恋一四七首」、恋二を「逢わずして慕う恋（承前）」、恋三を「契りを結んで後になお慕い思う恋一三二首」、恋四を「契りを結んで後になお慕い思う恋（承前七十首）」、恋五を「恋八二首」と大まかな恋愛段階で部立て分けをし、恋一の内訳を「ほのかに見て恋う四首」・「ひそかに恋う二八首」・「揺れる思い二〇首」・「寄るべなき恋一四首」・「時のみ過ぎ行く一〇首」と細項目化している<sup>(3)</sup>ことから、古今集の恋部構造については、時間的展開による構造であると認識されていると考へて良いであろう。

しかし、第二勅撰集である後撰集恋一部巻頭歌は、

からうしてあひしりて侍りける人に、つつむことありてあひがたく

侍りければ

源宗于朝臣

五〇七  
五〇八

あづまぢのさやの中山中中にあひ見てのちぞわびしかりける

しのびたりける人にものがたりし侍りけるを、人のさわがしく侍り  
ければ、まかりかへりてつかはしける

つらゆき

五〇九

暁と何かいひけんわかるれば夜ひもいとこそわびしかりけれ

と、既に逢いて後の詠歌から始まり、恋一の途中に、

女につかはしける

よみ人しらず

五一七  
五一八

きえはててやみぬばかりか年をへて君を思ひのしるしなれば

「逢わずして慕う恋」の歌や、

女のもとに

(題しらず) よみ人も

五三四  
五三五

逢ふ事はいとど雲井のおほぞらにたつ名のみしてやみぬばかりか

と、それこそ『大和物語』八五段の、

おなじ右近、「桃園の宰相の君なむすみたまふ」などいひののしりけれど、虚言なりければ」

かの君によみて奉りけり。

よし思へ海人のひろはぬうつせ貝むなしき名をば立つべしや君

となむありける。

という右近の歌のように、噂を真実実体のあるものにしたというもののまでが、同一の部立である恋一に存在する。工藤重

矩氏が、「本集の恋部の排列には、古今集のような恋の展開を追う時間的な秩序はない。」と指摘されるような構造である。

さて、本論の拾遺集恋部の構造であるが、拾遺集には、それに先行する拾遺抄がある。この恋部の構造については、阪口和子氏が恋上の構造を「忍ぶ恋から待つ恋まで恋の進行に合わせて歌群が並べられ」ているとされており、恋愛段階による進行配列を認めておられるとして良いであろう。拾遺集についても、小町谷照彦氏は、「恋一は未だ逢う以前の段階の恋で、秘められたものが次第に顕在化していく過程を、恋二は逢ったばかりの段階の恋で、いつか評判が立ち、逢ってますますつのる思い、(中略)恋三はやや飽きが来た段階の恋で、(中略)恋四はいよいよ忘れかけた段階の恋で、(中略)恋五はもはや絶望的な段階の恋で、(中略)こうして見ると、恋一から恋五へと恋の進展に応じた内容を持つていることが知られる。」とされ、小池博明氏は、『拾遺集』恋部の各歌群においても、前項の例(恋三八五〇八四六)からも理解されるように、恋の段階的推移にしたがって、歌々が並べられていると想定されるのである。<sup>⑨</sup>とする。その元となった拾遺抄も、そして増補再構成された拾遺集も、恋愛段階による進行配列であるならば、以下の「拾遺抄恋上拾遺集対比表」に見られるような、連続する歌番号の中での大きな移動や、大きく部立の枠を越えて移動することはないものである。そのような、事例が存在するならば、恋愛段階による恋愛進行段階配列とは異なった構成意図の存在を考えなければならぬか、あるいは、歌そのものの解釈に、それぞれ位置に合う解釈を示さなければならぬまい。

## 拾遺抄恋上と拾遺集

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
二四四	二四三	二四二	二四一	二四〇	二三九	二三八	二三七	二三六	二三五	二三四	二三三	二三二	二三一	二三〇	二二九	二二八	抄
六八六	九四一	六九三	六八五	六七三	六七七	六四三	六七五	六七四	六七六	六七三	六八二	六六二	六六六	六三三	六三三	六三二	集
恋一	恋五	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	恋一	集部立
34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	No.
二六一	二六〇	二五九	二五八	二五七	二五六	二五五	二五四	二五三	二五二	二五一	二五〇	二四九	二四八	二四七	二四六	二四五	抄
八七四	八四九	七三三	七六六	七〇〇	七四四	七三二	七四四	七三三	七〇〇	七三〇	七三三	六九四	六九五	六八五	九三四	六九二	集
恋四	恋四	恋二	恋二	恋二	恋二	恋二	恋三	恋二	恋二	恋二	恋二	恋一	恋一	恋一	恋四	恋一	集部立
51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	No.
二七八	二七七	二七六	二七五	二七四	二七三	二七二	二七一	二七〇	二六九	二六八	二六七	二六六	二六五	二六四	二六三	二六二	抄
七三三	八五五	八二二	七六八	七七七	九四〇	八五三	九六六	七九八	八三三	九二二	九五三	七五五	七五五	七五四	七三三	八〇八	集
恋二	恋三	恋三	恋二	恋二	恋五	恋四	恋五	恋三	恋三	恋四	恋五	恋二	恋二	恋二	恋二	恋三	集部立
68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	No.
二九五	二九四	二九三	二九二	二九一	二九〇	二八九	二八八	二八七	二八六	二八五	二八四	二八三	二八二	二八一	二八〇	二七九	抄
六四五	六四四	六四三	八四七	八七	九四	九六	七五七	八〇七	九三	七四	八四八	七四四	八三三	七六二	七三三	七二	集
恋一	恋一	恋一	恋三	恋三	恋四	恋五	恋二	恋三	恋五	恋二	恋三	恋二	恋三	恋三	恋二	恋二	集部立
										75	74	73	72	71	70	69	No.
										三〇二	三〇一	三〇〇	二九九	二九八	二九七	二九六	抄
										九六五	九一〇	八八九	九〇九	九〇八	八九	七二	集
										恋五	恋四	恋四	恋四	恋四	恋三	恋三	集部立

上記対照表のように、部立としての集合は見られるものの、移動の激しい事例もいくつか目に付くのである。前掲一覧表の中から、前後が異なる巻に移動している事例を中心に、具体的に事例を挙げて考察してみよう。

【事例 15・16・17】

題不知

読人も

二四 なげきあまりつひにいろにぞ出でぬべきいはぬを人のしらばこそあらめ (集・恋一・六五)

二四 いかでかとおもふ心のあるときはおぼめくさへぞうれしかりける (集・恋一・六三)

をんなのもとにつかはしける 大中臣輔親

二四 いかでいかでこふるころをなぐさめてのちのよまでのものをおもはじ (集・恋五・四)

題不知

源経基

二四 あはれとし君だにい**はばこひわびて**しなんいのちのをしからなく (集・恋一・六六)

抄では、二四「**つひにいろにぞ出でぬべき**」から二四「あはれとし君だにい**はばこひわびて**しなんいのちのをしからなく」と、逢わずして慕う男の思いを詠んだ歌の連続と理解される。

増補再構成された集では、六三番歌(抄二四)前後は、

ちぎりけることありける女につかはしける 菅原輔昭

六九 露ばかりたのめしほどのすぎゆけばきえぬばかりの心地こそすれ

返し よみ人しらず

六九 つゆばかりたのむることもなきものをあやしやなにに思ひおきけん

題しらず

六九 流れてとたのむるよりは山河のこひしきせぜにわたりやはせぬ (異本五句「わたしやはせぬ」)

六三 あひ見てはしにせぬ身とぞなりぬべきたのむるだにのぶるいのちは (抄・恋上・二五)

六四 いかでかと思ふ心のある時はおぼめくさへぞうれしかりける (抄・恋上・二四)

とあつて、季吟の八代集抄では、「露ほと頼め約束せし事のかひなくて過ゆけは消はてぬはかりの心ちすると也きえぬは露の縁也<sup>10</sup>」と、逢瀬を期待させる「頼む」の歌が連続する。六五「わたりやはせぬ」では、『伊勢物語』二二段の男が、

四 あひ見ては心ひとつをかは島の水の流れて絶えじとぞ思

とはいひけれど、その夜いにけり<sup>11</sup>。

後々のこととして約しながら、即時に行動に出たが、その男のようで、女の歌とすると、挑発的な歌となってしまうが、片桐洋一氏による異本第一第二系統本は「わたしやはせぬ<sup>12</sup>」とあり、異本系統の本文の方が、この歌群には適合しよう。これに、季吟が「何とそしてあはましとおもふ時はかの人のうちおほめきてしらすかほにあへしらふも嬉しきと也少とりあへるも只なるよりは悦ふ儀也<sup>13</sup>」とする六六「おぼめくさへぞうれしかりける」と続いて、期待し喜ぶ歌で結ぶ。

四七 一番歌(抄二四) 前後も、六五「恋するにしにする物」六六「こひてしねこひてしねとや」六七「こひしなばこひもしねとや」と「恋死に」から、歌語「恋ふ・恋し・恋」を詠みこむ歌群を形成する。これに続いて、

(題しらず)

重之

六八 恋しきをなぐさめかねてすがはらや伏見にきてもねられざりけり

読人しらず

六九 こひしきは色にいでも見えなくにいかなる時かむねにしむらん

七〇 しのばむにしのばれぬべきこひならばつらきにつけてやみもしなまし (抄・恋上・二七)

女につかはしける

大中臣能宣

七一 いかでいかでこふる心をなぐさめてのちの世までの物をおもはじ (抄・恋上・二四)

題しらず

よみ人しらず

六二 限なく思ふ心のふかければつらきもしらぬものにぞありける

(抄・恋下・三七)

六三 わりなしやしひてもたのむ心かなつらしとかつは思ふものから

(抄・恋下・三三)

六四 うしと思ふものから人のこひしきはいづかをしのぶ心なるらん

(抄・恋下・三六) (恋二・七三)

六五 一番歌(抄三三)がここに位置することで、恋に関わる歌語と「思ふ」に関わる歌語とが複合して、六二「こふる心」六三「思ふ心」六四「たのむ心」六五「しのぶ心」と「……心」という歌語表現を持つ歌の連続を構成する。六四番歌は重複重載歌としてここに組み入れられていることも、歌語を中心に据えた配列を意図したものと見えよう。

集六六番歌(抄三四)は、六六番歌(抄三五)の、

天曆御時歌合に

中納言朝忠

六六 あふ事のたえてしなくは中中に人をも身をも怨みざらまし

(抄・恋上・三五)

から、六六番歌、

六七 あふ事をいつともしらで君がいはむ時は山の松ぞくるしき

まで、「逢ふ事」という初句歌語同一で連続する。そして、六八「逢ふにかふ」「あはぬしにせん」六九「逢ふ事の年月」と「逢ふ」という歌語の歌が連続し、六四番歌まで「逢ふ」の歌語が認められる。そして、六四番歌では、

(題しらず)

よみ人しらず

六八 いきたればこひする事のくるしきを猶いのちをばあふにかへてん

と、「いのちをばあふにかへてん」と「恋死に」が複合し、以下、

大伴百世

六九 こひしなむのちはなにせんいける日のためこそ人の見まくほしけれ

(抄・恋上・三四)

(題しらず)

源經基

六六 あはれとしきみだにい**はばこひわびてしなんいのち**もをしからなくに  
(抄・恋上・二四四)

【事例二九】

抄は、二四番歌から恋死にを主題とする歌四首が並ぶ、

(題不知)

読人不知

二五 あひみてはしに**せぬみとぞなりぬべきたのむるにだにのぶるいのち**を  
(集・恋一・六九二)

人丸

二六 ちはやぶる神のやしろもこえぬべしいまは我がみのをしげなければ  
(集・恋四・六四)

太宰監大伴百世

二七 恋ひし**なんのちは**なにせんいけるひのためこそ人を見まくほしけれ  
(集・恋一・六八五)

抄の二五・二七番歌の集(六九二・六八五)での配列については、前述したが、二四番歌は、集では、

題しらず

よみ人しらず

九九 **夢**にさへ人のつれなく見えつればねてもさめても物をこそおもへ  
(抄・恋下・三五六)

一〇 見る**夢**のうつつになるはよのつねぞうつつのゆめになるぞかなしき

一一 逢ふ事は**夢**の中にもうれしくてねざめのこひぞわびしかりける  
(抄・恋下・三五七)

一二 わすれじよ**ゆめ**とちぎりし事のはうつつにつらき心なりけり  
(抄・恋下・三五八)

一三 あたらしと何にいのちを思ひけんわすればふるくなりぬべき身を

柿本人麿



二四 ちはやぶる神のいがきもこえぬべし今はわが身のをしげくもなし

(抄・恋上・二四六)

と歌語「夢」に関わる歌群を形成し、二三「わすれじよゆめとちぎりし事のは」を、二三「わすればふるくなりぬべき身」、相手に飽きられ忘れられてしまうようなこの身なのに、「あたらしと何にいのちを思ひけん」惜しいとどうして命を思ったのだろうかと、それを、恋四巻末歌二四「今はわが身のをしげくもなし」と捨身で連続する。そして、巻一五恋五の巻頭歌二五番歌、

善祐法師ながされ侍りける時、母のいひつかはしける

二五 なく涙世はみな海となりななんおなじなきさに流れよるべく

(抄・恋下・三六)

と、同じく入水という捨身で続く。季吟は、「泪つもりて世界海となりたらは善祐と同渚に流よりて一所にあらんと也母の心哀也但此哥恋にあらねと子を思ふも恋慕哀愁の儀なれはにや社常は宋人ながら風軀唐詩にかよへは三昧詩の巻頭に入したくひ成へし」と慈母の慕情を恋慕哀傷の情とする。抄では、「善祐がながされ侍りける時ある女のいひつかはしける 読人不知」と、ある女とし、同貞和本では「二条后イ」とする。また、集でも、非定家本系統本は抄と同様に「ある女」である。捨身の情をもつて伊豆に流される善祐を思うのは、流罪の原因となつた藤原高子か、善祐の母親か、という解釈が影響したものであろうが、捨身による二四・二五を意識して、抄の恋死にの歌群からの移動であらう。

【事例三 25・26・27・28】

(題不知)

勝観法師

二五 しのぶればくるしかりけりはなすすき秋のさかりに成りやしなまし

(集・恋二・七〇)

読人不知

二五 よそに見て有りにしものを花すすきほのかに見てぞ人は恋しき

(集・恋二・七三)

二五 あふことはかたわれづきの雲がくれおぼろけにやは人は恋しき

(集・恋三・七四)

二五 あひ見でも有りにしものをいつのまにならひて人の恋しかるらむ

(集・恋二・七三)

抄三五番歌は、忍ぶ恋の歌で、秋の盛りとなつて花薄の穂がでる、表に現すことができることを希求する歌で、告白以前であり、歌語「花薄」の連続から、三五・四番歌は、歌末歌語同一と三五番歌の歌語の類似の並びである。集の七〇番歌前後は、六七・八番歌の五月五日の菖蒲から、六九番歌の蚊遣火・夏の夜、当該歌の秋の初めを意識した「はなすすき秋のさかりに成りやしなまし」、七一・二・三番歌「七夕」と、夏と秋の季節の景物と恋の歌が並ぶ。この季節の景物と恋の歌群は、恋三の八〇から八四七番歌にも見られる。

集の七三番歌前後は、

七〇 身をつめば露をあはれと思ふかな暁ごとにいかでおくらん

(抄・恋上・三五)

七一 うしと思ふものから人のこひしきはいづこをしのぶ心なるらん

(重複重載・恋五・九四 抄・恋下・三〇六)

七二 よそにても有りにしものを花すすきほのかに見てぞ人は恋しき

(抄・恋上・二八五)

七三 夢よりもはかなきものはかげろふのほのかに見えしかげにぞありける

(抄・恋上・二六三)

とあつて、七三番歌は重複重載歌で、別に論じたが、歌語連続・複合連結による配列意図が窺われる。以下、歌語「夢」歌群に繋がっていく。そして、抄五四番歌は、集では恋三の七四番歌と大きく移動する。七八四番歌前後は、恋三巻頭から、初句歌語「あしひきの」の同一の歌が、七七から七三番歌と連続し、

題しらず

人まろ

七二 あしひきの山よりいづる月まつと人にはいひて君をこそまで

(抄・恋上・二八二)

七三 みか月のさやかに見えぬ雲隠見まくぞほしきうたてこのごろ

よみ人しらず

七四 逢ふ事はかたわれ月の雲がくれおぼろけにやは人のこひしき

(抄・恋上・二五四)

人まろ

七五 秋の夜の月かも君はくもがくれしばしも見ねばこころこひしき

円融院御時御屏風、八月十五夜月のかげ池にうつれる

家にをとこ女みてけさうしたる所 平兼盛

七六 秋の夜の月見るとのみおきつつ今夜もねでや我はかへらん

と、七二番歌「いもたちまちていねざらむかも」を受けて、七三「月まつと人にはいひて君をこそまで」と受けて、月が歌材の歌群に入る。そして、歌語「月」と「雲隠」の歌、歌末歌語「こひしき」が同一の歌の並びと続く。

【事例四 29・30・31・32・33・34】

はじめてをんなのもとにまかりて又の朝につかはしける

能宣

二五 あふことをまちしつきひのほどよりもけふのくれこそひさしかりけれ (集・恋二・七四)

権中納言藤原敦忠

二五 あひみてののちの心にくらぶればむかしはものもおもはざりけり (集・恋二・七〇)

題不知

読人も

二五 あひ見てもなほなぐさまぬ心なくちよねてか恋のさむべき (集・恋二・七六)

二五 我がこひはなほあひみてもなぐさまずいやまさり成るここのみして (集・恋二・七三)

人丸

二六 あさねがみ我はけづらじうつくしき人のたまくらふれてしものを (集・恋四・八四九)

二六 かくばかりこひしき物としらませばよそにぞ人をみるべかりける (集・恋四・八七四)

三五番歌の詞書から、初めての逢瀬の後朝の歌であることは明確であり、歌意からして三五番歌までは、「あひみてののちの心」(三五)「あひ見ても」(三五・三五)によって明確である。ところが、三六番歌は、後朝の歌ではあるが、初めての後朝と規定する歌語は見当たらない。しかし、歌意から推して、初めての逢瀬の後朝の歌と解することは十分可能である。そして、三六番歌は初二句「かくばかりこひしき物と」により、前歌の状況と同一に理解して読むことが可能である。恋愛段階による歌群を形成していると認められる。これを、集で見ると、

## 題しらず

よみ人しらず

七六 夢かとも思ふべけれどねやはせしなにぞ心にわすれがたきは

七九 ゆめゆめこひしき人にあひ見すなさめてののちにわびしかりけり

権中納言敦忠

七〇 あひ見てののちの心にくらぶれば昔は物もおもはざりけり

坂上是則

七一 あひみてはなぐさむやとぞ思ひしをなごりしもこそこひしかりけれ

(後撰・恋三・七四)

よみ人しらず

七二 あひ見でもありにしものをいつのまにならひて人のこひしかるらん

(抄・恋上・二五 抄逢瀬以後)

七三 わが恋は猶あひ見てもなぐさまずいやまさりなる心地のみして

(抄・恋上・二五 抄逢瀬以後)

はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける

よしのぶ

七四 逢ふ事をまちし月日のほどよりもけふのくれこそひさしかりけれ

(抄・恋上・二五 抄逢瀬以後)

つらゆき

七五 暁のなからましかば白露のおきてわびしき別せましや

(後撰・恋四・八三)

七六 あひ見ても猶なぐさまぬ心かないくちよねてかこひのさむべき

(抄・恋上・二五抄逢瀬以後)

人まろ

七七 むばたまのこよひなあけそあけゆかばあさゆく君をまつくるしきに

よみ人しらず

七八 ひとりねし時はまたれし鳥のねもまれにあふよはわびしかりけり

(後撰・恋五・八九)

七九 葛木や我やはくめのはしづくりあけゆくほどは物をこそおもへ

本院の五の君の許にはじめてまかりて、あしたに

平行時

三〇 あさまだき露わけきつる衣手のひるまばかりにこひしきやなぞ

と、重出歌ということまで冒しても、初句歌語同一や歌末歌語同一として並べ直しをしていることが窺われる。<sup>18)</sup>

そして、抄三〇(集六四) 番歌は、集の恋四巻頭歌として、

題しらず

人麿

八四 あさねがみ我はけづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを

(抄・恋上・二六〇)

元輔がむこになりて、あしたに

藤原実方朝臣

八五 時のまも心はそらになるものをいかですぐしし昔なるらむ

女性の後朝の情感を「うつくしき人のた枕ふれてしものを」と終助詞「ものを」により表現し、男性の後朝の情感を八五「心はそらになるものを」と表現する歌を並べ、八五「いかですぐしし」から、八五「いかでかひとりぬるとかやきみ」、八五「如何してけふをくらさむ」と続ける。八四番歌前後は、

人まろ

八三 こひこひて後もあはむとなくさむる心しくはいのちあらめや

八四 かくばかりこひしき物としらませばよそに見るべくありけるものを (抄・恋上・二六二)

よみ人しらず

八五 涙河のどかにだにもながれなんこひしき人の影や見ゆると

つらゆき

八六 涙河おつるみなかみはやければせきぞかねつるそでのしがらみ

とあつて、八三「こひこひて」八四「こひしき物」八五「こひしき人」と「恋」に関わる歌語による連続と、八三番歌を受けて、

八四「かくばかりこひしき物としらませば」の具体的なイメージを喚起するものとして繋がる。そして、以下、八五・六・七番歌三首は、初句歌語「涙河」同一である。

【事例五 38・39・40・41・42・43・44・45・46・47】

(天曆御時歌合)

能宣

二五 恋しきをなにつけてかなぐさめんゆめだにみえずぬるよなければ (集・恋二・七五)

読人不知

二六 うつつにもゆめにも人によるしあへばくれ行くばかりうれしきはなし (集・恋二・七五)

題不知

藤原有時

二七 あふことのなげきのもとをたづねればひとりねよりぞおひはじめける (集・恋五・九五)

入道摂政のまかりたりけるに、かどをおそくあけはべり

ければたちわづらひぬといひいれて侍りけるに

右大将道綱母

二六 なげきつつひとりぬるよのあくるまはいかにひさしきものとかはしる (集・恋四・九三)

題不知

読人不知

二九 たたくとてやどのつまどをあけたれば人もこずゑのくひなりけり (集・恋三・八三)

三〇 衣だになかに有りしはうとかりきはぬよをさへへだてつるかな (集・恋三・七八)

大伴坂上郎女

三七 くろかみにしろかみまじりおふるまでかかる恋にはいまだあはざる (集・恋五・九六)

人丸

三二 みなといりのあしわけをぶねさはりおほみ恋しき人にあはぬころかな (集・恋四・八五)

読人不知

三七 しのばんにしのばれぬべき恋ならばつらきにつけてやみもしなまし (集・恋五・九〇)

五月五日にあるをんなの人のもとにいひつかはしける

三四 いかともおもはぬさはのあやめ草ただつくづくとねこそなかるれ (集・恋二・七六)

抄の連続する一〇首であるが、二三番歌から初句歌語「夢」同一の三首が連続し、二五・六と「夢」の歌群を形成する。以下「独り寝」待つ恋という展開である。それぞれの集の前後を見ると、集七五番歌は、七三(抄二六)・七四(抄二四)・七五(抄二五)と抄による配列である。集七五番歌前後は、

題しらず

よみ人しらず

七三 いつしかとくれをまつまのおほぞらはくもるさへこそうれしかりけれ (抄・恋上・二五〇)

女の許にまかりそめて

大江為基

七三 日のうちに物をふたたび思ふかなとくあけぬるとおそくくると

題しらず

つらゆき

七四 ももはがきはねかくしぎもわがごとく朝わびしきかずはまさらじ

(抄・恋上・二八五)

よみ人しらず

七五 うつつにも夢にも人によるしあへばくれゆくばかりうれしきはなし

(抄・恋上・二八六)

七六 暁の別の道をおもはずはくれ行くそらはうれしからまし

と、暮れを待つ心情と暁の別れの心情を詠んだ歌群を形成している。

抄では、抄三六(集七五) 抄三七(集九五) 連続が、集では大きく巻の移動があつて、

ものいひ侍りける女の、のちにつれなく侍りて、さらに

あはず侍りければ

一条摂政

九五 あはれともいふべき人はおもほえで身のいたづらに成りぬべきかな

(抄・恋下・三四三)

題しらず

伊勢

九二 さもこそはあひ見むことのかたからめわすれずとだにいふ人のなき

(抄・恋下・三四五)

藤原有時

九五 あふことのなげきの本をたづねればひとりねよりぞおひはじめける

(抄・恋上・二六七)

つらゆき

九五 おほかたのわが身ひとつのうきからになべての世をも怨みつるかな

(抄・恋下・三四六)

「つらし」「思ふ」という歌語の歌の連続(九四番歌から) 九六「かはらじと思ふかはぞこひしき」 九七「おもはぬにかはらぬ

かはぞ心ならまし」 九五「おもほえで」と続き、九〇で「あはれともいふべき人」と複合して、九二「わすれずとだにいふ人」



に、そして「あひ見むことのかた」きことから、五三「あふことのな」い嘆き、その嘆きの根源は独り寝にありとする五三から、季吟が「此哥は思はれぬにても忘らるゝにても身の上のうきからになへて世上まてうらめしく覚る心也<sup>(19)</sup>」と恋の苦しみの大方が我が身が根源であると五三へと展開する。歌意や主題にも関わるが、歌語による展開が認められよう。

次の抄三九(集八三)は、

題しらず

人まろ

八八わがせこをぎませの山とひとはいへど君もきまさぬ山のならし

山辺赤人

八九我が背子をならしの岡のよぶこどり君よびかへせ夜のふけぬ時

(抄・恋上・三九)

よみ人しらず

八〇こぬ人をまつちの山の郭公おなじ心にねこそなかるれ

八三しののめになきこそわたれ時鳥物思ふやどはしるくやあるらん

(抄・恋上・三七)

八三たたくとてやどのつまどをあけたれば人もこずゑのくひなりけり

(抄・恋上・三九)

八八・九が初句歌語同一、八九「ならしの岡」「呼子鳥」から、八〇「まつち山」「時鳥」と、歌枕と鳥で続き、八三「時鳥」「宿」

から、九三「宿」「水鶏」と続く。八〇番歌以降八四番歌まで季節の景物と恋が季節の推移に合わせて配置されている。

抄三〇(集五九)は、月にかかわる歌語の歌群の五五「長月の在明の月」を受けて、五六「月影」そして「秋の夜」と複合して、「夜」にかかわる歌語の歌群へと繋がる。

月あかき夜、人をまち侍りて

五六ことならばやみにぞあらまし秋のよのなぞ月かげの人だのめなる

(抄・恋下・三三)

題しらず

春宮左近

七九 くらぬ夜の心をしらでおほぞらの雨をつらしと思ひけるかな

(抄・恋下・三三)

よみ人しらず

七八 衣だになかに有りしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつるかな

(抄・恋上・二七〇)

七九 ながき夜も人をつらしと思ふにはねなくにあくる物にぞ有りける

抄三七 (集九六) は、

題しらず

よみ人しらず

九四 せをはやみたえずながる水よりもつきせぬ物は涙なりけり

(後撰・恋上・二七〇)

九五 わがごとく物思ふ人はいにしへも今ゆくすゑもあらじと思ふ

(抄・恋上・三〇二)

坂上郎女

九六 くるかみにしろかみまじりおふるまでかかるこひにはいまだあはざるに

(抄・恋上・二七二)

九三・四・五については、別に指摘したが、<sup>(20)</sup>九四「たえずながる水よりもつきせぬ」と九五「いにしへも今ゆくすゑ」と継続する時の表現と、比類無きことを表現した二首を並べたものと考えられよう。

次の抄三七番歌 (集八五) は、

一条摂政、内にてはびんなしさとにいだよといひ侍りけ

れば、人もなき所にてまち侍りけるに、もうでこざりけ

れば

小式命婦

八五 如何してけふをくらさむこゆるぎのいそぎいでもかひなかりけり

題しらず

人まろ

八五 みなとிரりの葦わけを舟さはりおほみわが思ふ人にあはぬころかな

(抄・恋上・二七二)

八五 いはしろのの中にたてる結松心もとけず昔おもへば

(重複重載・雑恋・二五六)

既に重載重複歌の考察で、「八五・三番歌は、『小余綾の磯』から『急ぎ出でも』と、磯の縁語の貝を引き出し、甲斐無しへと展開する歌であり、次の八五番歌は、河口の港に入る舟が、葦の密生が障碍になるという情景から、恋の妨げが多いと嘆く歌から、昔日の恋愛を思い心安らかでないと岩代の松で喩え、以下、歌枕関連歌へと繋ぐのである。<sup>(2)</sup>

そして、抄三三番歌(集九〇)は、

九〇 しのばむにしのばれぬべきこひならばつらきにつけてやみもしなまし (抄・恋上・二七三)

女につかはしける

大中臣能宣

九四 いかでいかでこふる心をなぐさめてのちの世までの物をおもはじ (抄・恋上・二四三)

題しらず

よみ人しらず

九五 限なく思ふ心のふかければつらきもしらぬものにぞありける (抄・恋下・三七)

九六 わりなしやしひてもたのむ心かなつらしとかつは思ふものから (抄・恋下・三四)

九七 うしと思ふものから人のこひしきはいづこをしのぶ心なるらん (重複重載・恋二・七三抄・恋下・三〇六)

と、「思ひ死に」の九五番歌から、九五「恋死に」に繋げ、九六・七と初句歌語「恋しき」同一で連続する。そして、「恋」と「つらし」の歌語の九〇番歌から、九二「恋ふる心」九三「思ふ心」九四「頼む心」九五「偲ぶ心」と連続する。抄三三(集七七)は、既に事例五の中で触れたが、抄が季節の景物と恋の構造を持つ、これを増補する形で続けている。

【事例六 57・58・59・60】

(題不知)

人丸

二六 たのめつつこぬよあまたに成りぬればまたじとおもふぞまつにまされる (集・恋三・八四八)

つらゆき

二五 ももはがきはねかくしぎも我がごとくあしたわびしきかずはまさらじ

(集・恋二・七四)

をとこのとひ侍らざりければつかはしける 読人不知

二六 ありへんとおもひもかけぬよの中はなかなか身をぞうらみざりける

(集・恋五・九三)

題不知

二七 ゆふけとふうらにもよく有りこよひだにこざらん人をいつかたのまむ

(集・恋三・八七)

二八 「たのめつつこぬよあまたに成りぬれば」や二六詞書「をとこのとひ侍らざりければ」二七「こよひだにこざらん人をいつかたのまむ」から、中絶えた仲の恋の歌群と考えられよう。三五の歌意は季吟によると、「もゝはかきはねかく鳴 古今に暁の鳴の羽かき百羽かきとあるを本哥にて百羽かく数はおほくとも我朝の別の侘しさの数にまさらしと也」と、古今集の巻一五・恋五の

二九 暁のしぎのはねがきももはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく

を本歌とし、中絶えた仲の恋の歌群を形成している抄では、中絶えによる女が男を待つて過ぐす朝の侘びしい数として解釈しなければ成るまい。

抄三四(集六四)は、恋三の巻末歌である。前の歌は、季節の景物と恋の歌の連続で、八四は重複重載歌で、

さだふんが家歌合に

よみ人しらず

八四 霜のうへにふるはつ雪のあさ氷とけずも物を思ふころかな

(重複重載・冬・三九)

たえて年ごろになりにける女の許にまかりて、雪のふり

侍りければ

源景明

八五 三吉野の雪にこもれる山人もふる道とめてねをやなくらん

(抄・恋上・二五)

題しらず

人麿

八四 たのめつつこぬ夜あまたに成りぬればまたじと思ふぞまつにまされる (抄・恋上・二八四)

八六 「霜のうへにふるはつ雪のあさ氷」と、冬の景物を並べ、八代集抄に「雪の朝に氷たる也序哥也心明也」とあるように、凍り、凝り固まった雪氷がとけない、打ち解けないで物思いに耽ると、前歌八四とともに恋に打ち拉がれる思いを詠んだものである。八七は同じ「雪」で連続し、中絶えの仲を詠む男の心情の歌で、八四は、中絶えの仲を詠む女の心情の歌で対応する。恋愛の段階構造というよりも、歌語と対応対応の対構造が認められるのではあるまいか。

抄二五 (集七四) は、事例五に記したように、暮れを待つ心情と暁の別れの心情を詠んだ歌群を形成する。

次の、抄二六 (集九三) は、二九「燃え果てて灰となりなん時」、恋の終わりは死ぬ時と詠むのに続いて、

三〇 いづ方にゆきかくれなん世の中に身のあればこそ人もつらけれ

三一 有りへむと思ひもかけぬ世の中はなかなか身をぞなげかざりける (抄・恋上・二八六)

三二 いつはりと思ふものから今さらにたがまことをか我はたのまむ (古今・恋四・七三)

三〇「いづ方にゆきかくれなん」は、死を暗示して連続し、歌語「世の中」が複合して三二に続き、かつ、三二で「思ひもかけぬ」と「思」と複合して以下の歌に続く。

抄二七 (集八七) 前後は、八三「わがせこがありかもしらでねたる夜」から、八四「いたづらぶし」と独り寝の連続で、

(題しらず) (よみ人しらず)

八四 いかなりし時くれ竹のひと夜だにいたづらぶしをくるしといふらん

八五 いかならんをりふしにかはくれ竹のよるはこひしき人にあひ見む

ひとまろ

八六 まさしてふやそのちまたにゆふけとふうらまさにせよいもにあふべく

八七 ゆふけとふうらにもよくありこよひだにこざらむきみをいつかまつべき (抄・恋上・二八七)

八〇八 夢をだにいかでかたみに見てしかなあはでぬるよのなくさめにせん (抄・恋上・二六二)

と、八〇四・五は、初句の類似、歌語「呉竹」の連続、八〇五「恋しき人に逢ひ見む」と八〇六「妹に逢ふべく」と繋ぎ、八〇六・七は「夕占問ふ」で連続し、「夕占」「夢」に頼る八〇七・八と続け、以下に歌語「夢」の歌にと続く。

【事例七 61・62・63・64】

万葉集和し侍りける

順

二〇六 おもふともこのころのうちにしらぬ身はしぬばかりにもあらじとぞおもふ (集・恋二・七五)

題不知

読人不知

二〇九 いきしなんことのころにかなひせばふたたびものはおもはざらまし (集・恋五・九八)

おこなひすとして山寺にこもり侍りけるをとこのをんなの  
もとにつかはしける

二一〇 人にだにしられでいりしおく山にこひしさいかでたづねきつらん (集・恋四・九四)

冬ひえの山にのぼりて春までおとづれ侍らざりける人の

許に

清正むすめ

二二一 ながめやる山辺はいとどかすみつつおぼかなさのまさるはるかな (集・恋三・八七)

抄は、死や遁世籠居を意識した恋の歌四首が、対のように並んでいる。

抄二〇六 (集七五) は、五三「苦しき物と知らすべく」五五「知るや君知らずはいかに」の歌語「知る」を受けて、

七五 あすしらぬわが身なりとも怨みおかむこの世にてのみやまじと思へば (抄・恋下・三四)

題しらず

人麿

七五 思ふなと君はいへどもあふ事をいつとしりてかわがこひざらん

万葉集和し侍りけるに

源順

七五 おもふらむ心の内をしらぬ身はしぬばかりにもあらじとぞ思ふ

(抄・恋上・二六)

「知る」に関連がある歌語によつて並べられる。

抄二八九(集九二八)

(題しらず)

よみ人しらず

九七 すてはてむいのちを今はたのまれよあふべきことのこの世ならねば

(抄・恋下・三六)

九八 いきしなん事の心になかなひせばふたたび物はおもはざらまし

(抄・恋上・三九)

九九 もえはてはひとなりなん時にこそ人を思ひのやまむごにせめ

集九七(抄三六)の抄での位置は、恋下であるが、抄三〇(集三〇七)番歌以降は、集の哀傷になる。九七は現世では成就しない恋なので、来世を期待するもので、抄がその後哀傷歌に展開するのは理解できよう。九八は、八代集抄で「恋に死まほしく又生まほしき時もあるに自由ならねは二度物思ふと也」と注し、現代の注釈も生きること死ぬことが思い通りになるならばという理解をしている。前後の歌からすれば、「生き死に」の「生き」には意味が無く「死ぬ」ことが思い通りになるならば、こんな思いはしないというのではなからうか。長元九年(一〇三六)歿とされる源道成の家集に、

をとこのある女のもとにまかりて、あひはべらざりけるつとめて

九あふさかのせきをこさせずありしかばいきしにかへる心ちこそすれ

とあつて、れるは、逢瀬を遂げさせないままであつたならば、死んでしまう気持がすることだ、というのである。ここも、恋の苦しみに耐えかねて死を思い、そうなれば、恋の情念もお終いになるという並びであろう。そして、事例六に前述した九三〇番歌に続く。

以上、抄恋上から再構成された集のうちから、移動が大きな事例を挙げて論じてきたが、恋の諸相と歌語に対する並びの

配列は見られたが、拾遺集の恋部構造が、恋愛段階による段階推移をその構造の主幹に位置付けたものとは考えがたいのである。

## 注

- (1) 『古今集の構造に関する研究』風間書房 昭和四〇・九 四五七頁。
- (2) 有精堂 一九八七・三 一三八頁。
- (3) 小島憲之・新井榮蔵校注 岩波書店一九八九・二 による。
- (4) 『新編国歌大観』一 角川書店 昭和五八・二 以下、勅撰集の和歌引用は特別に断らない限りすべてこれによる。
- (5) 高橋正治校注・訳『新編日本古典文学全集』小学館 一九九四・一二 による。
- (6) 和泉古典叢書3『後撰和歌集』和泉書院一九九二・九 一〇一頁頭注
- (7) 『貫之から公任へ三代集の表現』第二章公任と『拾遺抄』Ⅱ恋部の構成と内容』和泉書院二〇〇一・三 八一頁
- (8) 『拾遺集恋歌の表現構造』『国語と国文学』四五巻四号昭和四五・四 七〇頁
- (9) 『拾遺集の構成』新典社 平成八・一 一五七頁
- (10) 八代集抄『拾遺和歌集』下・十二丁裏
- (11) 福井貞助校注・訳『新編日本古典文学全集』小学館 一九九四・一二 による。
- (12) 『拾遺和歌集の研究』大学堂書店・昭和四五・一二・三三二頁・五四六頁
- (13) 八代集抄『拾遺和歌集』下・十三丁裏
- (14) 拙論『拾遺和歌集の構造——重複重載歌を通して——』『二松学舎大学人文論叢』第七八輯平成一九・三・六九・七〇頁
- (15) 『拾遺和歌集の構造についての試論——初句歌語同一・歌末歌語同一・重複歌・重出歌をめぐって——』平成五・三 二松学舎大学人文論叢 第五十輯
- (16) 八代集抄『拾遺和歌集』・五一丁表
- (17) 『拾遺抄——校本と研究——』片桐洋一編著・大学堂書店・昭和五二・三
- (18) 『拾遺和歌集の構造——古今和歌集・後撰和歌集の重出歌を通して——』(一)『二松学舎大学大学院紀要』『二松』平成一九・三・「拾遺和歌集の構造——古今和歌集・後撰和歌集の重出歌を通して——」(二)『二松学舎大学紀要』平成一九・三・「拾遺和歌集の構造——古今和歌集・後撰和歌集の重出歌を通して——」(三)『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第三七集平成一九・三
- (19) 八代集抄『拾遺和歌集』・五四丁表
- (20) 『拾遺和歌集の構造——古今和歌集・後撰和歌集の重出歌を通して——』(三)『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第三七集平成一九・三・一四二・三頁
- (21) 『拾遺和歌集の構造——重複重載歌を通して——』『二松学舎大学人文論叢』七八輯平成一九・三 七二頁
- (22) 八代集抄『拾遺和歌集』・一八丁表裏
- (23) 八代集抄『拾遺和歌集』・五一丁裏
- (24) 小町谷照彦新日本古典文学大系7岩波書店平成二・一、増田繁夫和歌文学大系32明治書院平成一五・一
- (25) 『新編国歌大観』七巻角川書店 平成一・四